

「いまさらですがレコードを楽しむ」Ⅱ

☆ はじめに

台風15号17号、19号と連続の襲来、大きな被害となりました。各地で大災害となり多くの犠牲者もでました。我が家は一部屋根が被害に遭った程度で済みましたが、大変なことになってしまいました。自然災害の恐ろしさを身をもって感じました。被害に遭われた皆様にはお見舞いを申し上げ、一日も早く日常を取り戻せるようお祈り申し上げます。

さて今回のスタジオ夜話、前号でも予告したように「いまさらですがレコードを楽しむ」Ⅱです。前号でも触れましたが本誌FDIはフルデジタルイノベーションというデジタルの技術革新あるいは新機軸というスタンスで発行されている雑誌です。では何故こうしたデジタル時代にアナログレコードがV字回復しているのでしょうか？その秘密？を取材をもとに解き明かして(チョット大袈裟)お話します。アナログレコードの世界へのお付き合いよろしくお願ひいたします。

☆ 「アナログレコードの基礎の基礎」 アナログレコードができるまで。

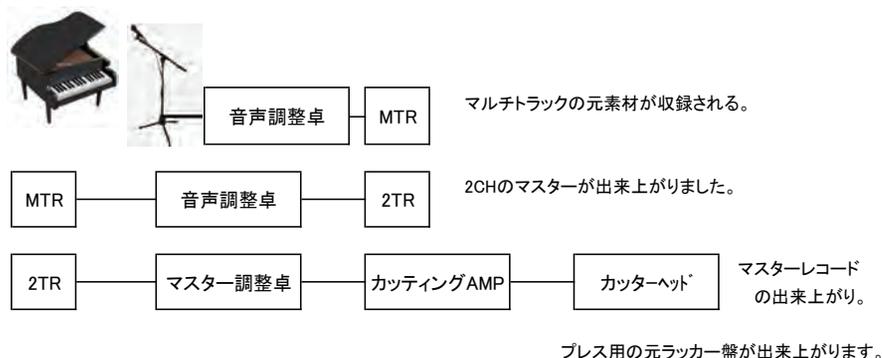
読者皆様、特に諸先輩方は当たり前のようにアナログレコードを創る工程をご存じのこととは思いますが、最近のエンジニアの方の中には全くご存じない方もいらっしゃるかもしれません。それは問題ではありません。また必要のない知識かもしれません。しかし今回のスタジオ夜話ではこのアナログレコード人気回復の秘密？に迫ります。そこでアナログレコード制作の基本、その製造工程のお話です。

図-1をご覧ください。製造工程が2つあります。一つは①音楽ソース(マスターテープ)からカットングするもの、もう一つは②音楽演奏を直にカットングする

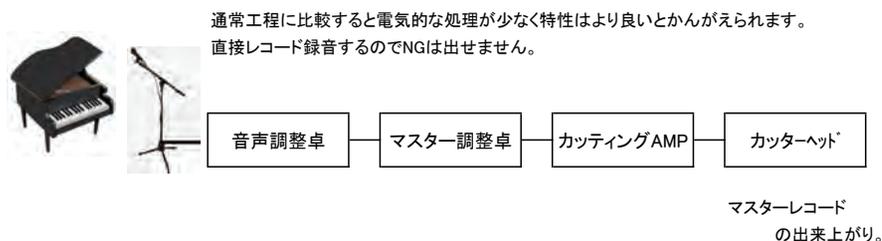
アナログレコード カットングの工程

図-1

① 通常の工程



② ダイレクトカットングの工程



方法です。

アナログレコードが全盛のころ、より良い音を求め行われた実験的製造方法が②のダイレクトカットングによる製造方法でした。しかしここにも大きな問題がありました。その問題とはエンジニアの感性？というか経験値？というか、かなり曖昧な正にアナログ的問題でした。この問題は現在のデジタル世界にもあり得ることなので検証しておく必要はあります。

・・・ダイレクトカットングの実験・・・

芥川賞作家の五味康介氏をご存じでしょうか？この作家は無類のオーディオマニアとしても有名でした。諸先輩方はよくご存じのことと思われます。この作家は多くのオーディオや音楽評論を後世に残しました。そして今回のテーマにすこぶる重要な実験もしていました。

ダイレクトカットングの実験です。ノ

イマン社の新しいカットングマシーン「SX68」1968年頃による実験です。五味氏の語った文章を紹介します。

ノイマンのカットング・マシンを購入している某社へ行って、レコードを録音してみたことがある。私はシロウトである。しかしシロウトでも技術者に介添えしてもらえば、カットングぐらいはできる。(略)

そしてカットングと同時に刻々その音を再生し、モニター・スピーカーで聴けるようにできているが、これで聴くと「マスター・テープそのままの音」では断じてなかった。(略) さてそうしてカットングしたレコード(私の場合はラッカー盤)をわが家へ持ち帰って聴いてみたが、驚いた。さっぱりよくない。念のために知人のジム・ランシングのパラゴンで聴いてみたが、やはりよくない。別の知人のアルテックA7でも鳴らしたが、よくない。

ことわるまでもなく、市販のレコードは、

カッターで直接カットした、ラッカー盤を原盤とし、これをメッキし、再度プレスしたものである。私のラッカー盤は、これらの二工程を経っていないから、理論的には、よりマスター・テープに忠実といえるだろう。それがどうして悪い音なのか？と語っています。

そして音が悪くなった原因として次のように語っています。「音色を左右するのは、マシンではない（略）某社の技術者も、今までは高音域の音はコワくてゲインをあげてカットできなかったが、ノイマンの新製品（SX68）では、安心して出せると、その優秀性を強調していた。（略）それでいて、音が悪いのには、私の場合は理由があるらしい。

じつはそのマスター・テープをカットするとき、技術者は「ハイを落とさせてくれ」と言った。「一万五千ヘルツ以上はカットし、低いほうも四十ヘルツ以下は、切り捨てる。そのかわり七、八千ヘルツあたりを3dBあげる、そのほうが耳あたりがよくなる」と言うのである。私は、SX68の機能を全幅に信頼するなら、そういう小細工は意味がないだろうし、ご免だと断った。高低音域とも、マスター・テープのままにカットしたい、そのほうがさぞよからう、とシロウト考えて思ったわけだ。

結果は、見事、裏切られた。専門家は職人気質で、どの音域をどの程度もち上げ、あるいは落とせば、どのようにレコードとして快く鳴るかを知っているわけだ。最新式のカッターをもってしても、レコードの《いい音》は、まだ現場で働く人の、長年の体験による音創りそのものである。

つまりデジタル全盛の今日、ハイレゾであろうがなかろうが「音色を左右するのはマシンではない」専門家の職人気質で、長年の体験による音創りが重要だと教えているのです。



キングレコード関口台スタジオ 1ST
今回お世話になった管理統括部長 高橋邦明氏（右側）、
マスタリングエンジニアの上田佳子氏（中央）、筆者。

筆者も同感です。こうした実験でも理解できるようにエンジニアの存在が重要な要素となってきます。

はたして今日のアナログレコードは……。

☆キングレコードの取り組み 報告（第1回）イントロダクション

前号で、現在ソニーではアメリカで現用されていたマシンを購入して稼働させ、2017年にはワーナーミュージックもミキサーズラボのプロデュースでカットिंगを始めました。とお話しました。

また今年キングレコードの関口台スタジオでもノイマンのカットिंगマシンが稼働を始めました。そこでスタジオ夜話では、キングレコードの関口台スタジオを訪れアナログレコード制作の復活について取材させていただきました。その取材第1回目の報告です。

キングレコードの関口台スタジオはレコーディングはもとよりマスタリングルームを4つ、運用しているスタジオです。今回はそうした設備に加え同社が所有していた、かつての名器ノイマン SX74、真空管方式カッター・アンプ東芝 6GB8、平行PPも含め完全に復元させた環境を、様々なアーティストに提供できることになりました。アナログレコードの世界的に高まっている注目度、アーティストの需要を見据え、様々な対応を計画している様子です。



マスターカットングルーム
あまりにも綺麗に復帰したカットングマシンに興味津々、筆者も驚きの美しさでした。

今回取材にご対応いただいたのは、この計画の立案者であり推進の中心にあたる経営本部・管理統括部長の高橋邦明氏とカットिंगの最先端を担うマスタリングエンジニアの上田佳子氏です。

両氏はともに最近のアナログレコードの人気やレコード会社各社の対応を熟知しており、かねてからの計画を実現させました。この計画では1974年にノイマン社がSX74を開発。トランジスタ方式のカッター・アンプが良くなかったものと思われ、音がイマイチという評判から、キングレコードの関口台スタジオは、東芝 6GB8 という真空管方式を選択しました。

こちらのスタッフは、創意と工夫に長けています。スタジオ夜話的には素晴らしい挑戦といえます。（筆者想像）詳しい取材報告は次回以降に……。

☆ 次回は

「いまさらですがレコードを楽しむ」Ⅲ

カットングマシン取材レポート、キングレコードの関口台スタジオを中心に話します。秋も深まってきます。異常気象で様々な状況がありますが、乗り切りましょう。スタジオ夜話次回をお楽しみに！。

— 森田 雅行 —